



53 板谷波山《葆光白磁枇杷文花瓶》一点

昭和三年（一九二八）陶磁
径二六・七、高一九・三

板谷波山（一八七二～一九六三）はまぎれもなく近代日本における屈指の陶芸家である。彫刻からスタートした作家がやきもの作りと巡り会い、燦然たる作品の数々へと結実していった。それは近代陶磁にとってまさに幸福な出会いであった。波山の作陶の全盛期が戦間期（一九二〇～三〇年代）にぴたりと当て嵌まるのも、逆から見れば近代日本の絶頂期であったからこそ、このような優れた陶芸家が生まれたのだと言えるのかもしれない。

本作はふくよかに張り出した胴部をもつ短頸壺に、たわわに果実を实らせた枇杷が四方に彫り表されている。モノトーンの白磁であるが怜愍さはなく、波山が生み出した葆光釉がかけられているため、むしろ滑らかで大理石のような柔らかな光沢をたたえている。その活動初期には西洋のアル・ヌーヴォー様式の影響を直接的に受けていたが、すでに本作ではその段階を過ぎ、静謐で格調高い自らの作風を確立している。波山の魅力である彫刻、図案、釉薬のいずれもが優れた出来映えをみせる優品である。昭和三年九月に行われた秩父宮雍仁親王の御結婚に際して、東京府より献上された。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

1920s-30s モダン・エイジ — 光と影の造型美

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 70

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十七年九月十二日発行

© 2015, The Museum of the Imperial Collections, Sanmonmaru Shozokan